英學論考 39 (2010)

フィールディングとマンデヴィル
——『トム・ジョーンズ』と『蜂の寓話』

佐久間良子

ヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-54)の最後の小説『アミーリア』(*Amelia*, 1751)において、アミーリアの夫ブースは、ロンドンのニューゲイト監獄で再会した旧知のミス・マシューズに、彼の友人ジェイムズ大尉の友情を説明して、次のように自説を展開している。

> The Behaviour of this Man alone is a sufficient Proof of the Truth of my Doctrine, that all Men act entirely from their Passions; for *Bob James* can never be supposed to act from any Motive of Virtue or Religion; since he constantly laughs at both; and yet his Conduct towards me alone demonstrates a Degree of Goodness, which, perhaps, few of the Votaries of either Virtue or Religion can equal. (III,v. 114) [1]

それに対しミス・マシューズは、'I have been of that Opinion ever since I read that charming Fellow *Mandevil* (sic)' (114)と応じるので、ブースの考えがこの "charming Fellow"に近いということが推察される。しかし、ミス・マシューズの予想に反して、ブースはここでマンデヴィルに対する批判を始めるのである。

> 'Pardon me, Madam,' answered *Booth*, 'I hope you do not agree with *Mandevil* neither, who hath represented human Nature in a Picture of the highest Deformity. He hath left out of his System the best Passion which the Mind can possess, and attempts to derive the Effects or Energies of that Passion, from the base Impulses of Pride or Fear. (III, v. 115)

このあとブースは、「愛(Love)」[2] は確かに人間の心に存在すると主張しているので、マンデヴィルが除外している「人間の持つ最善の感情」とは、「愛」だということがわかる。

ここで言及されているバーナード・マンデヴィル(Bernard Mandeville, 1670-1733)は、オランダ生まれの医師で、英語を学ぶために渡ったイギリスで開業し、イギリス人女性と結婚した。そして英語の翻訳や著述を始め、1705 年に『ブンブンうなる蜂の巣』

(*The Grumbling Hive: or, Knaves Turn'd Honest*)という6ペンスのパンフレットを匿名で発表する。内容は、富裕で繁栄している蜂の巣に譬えた国家（イギリス）の繁栄が、あらゆる種類の職業における欺瞞や悪によって成り立っていて、"Thus every Part was full of Vice, / Yet the whole Mass a Paradice (sic)" (*The Fable of the Bees*, 67)という状態である。しかし、自らも欺瞞によって繁栄を享受しながら、他人の欺瞞を嘆き、"Good Gods, had we but honesty!" (70)と叫ぶ、蜂たちの声を聞き届けたジュピターが、それらの悪徳を一掃すると、蜂の巣（国家）はすっかり衰退してしまうというものである。

これにマンデヴィルは1714年、「序説」("Introduction")、「美徳の起源についての考察」("An Enquiry into the Origin of Moral Virtue")、および、もとの「ブンブンうなる蜂の巣」についての、20か所にわたる詳細で具体的な注釈("Remarks")をつけた、*The Fable of the Bees: or, Private Vice, Public Benefits* を出したが、それでもまだ注目されることはなかった。しかし1723年に、「慈善および慈善学校についての試論」("An Essay on Charity and Charity-Schools")と「社会の本質についての探究」("A Search into the Nature of Society")という2編を加えた新版を出版したところ、突然、激しい非難がまきおこる。ミドルセックスの大陪審によって「公的不法妨害」として提訴されたのを始めとして、当代の哲学者や神学者たちの批判を浴び、彼は死ぬまでそれらにたいする反論を書き続けるが、彼にたいする非難は死後も続くことになる。

フィールディングもこのような批判者の一人である。彼は上記の『アミーリア』のほか、小説『トム・ジョーンズ』(*The History of Tom Jones, A Foundling*, 1749)、『チャンピオン』(*The Champion*, 1739-41)、『トルー・ペイトリオット』(*The True Patriot*, 1745-6)、『コヴェント・ガーデン・ジャーナル』(*The Covent-Garden Journal*, 4 January-25 November 1752)等の定期刊行物において、たびたび、ホッブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)、ラ・ロシュフーコー(La Rochefoucauld, 1613-80)、マンデヴィルにたいする批判をおこなっている。たとえば1740年1月22日の『チャンピオン』誌では、彼らは "Virtue is the greatest Evil" (135)で、人間の幸せの妨げになると考えていると批判し、次の号では、プラトンにならって美徳を女性に喩え、彼らが美徳を、外見も中身も魅力のないものと人間たちに思いこませようとしていると主張している(138-39)。

マンデヴィルの『蜂の寓話』に収められた「美徳の起源についての考察」で説かれているのは、次のようなことである。文明の発達にともない、立法者やその他の賢人たちが、自分たちが支配する人間たちにたいし、自らの欲求を抑え、私欲より公益を

考える方が有益であると信じ込ませるために、名誉と恥の概念を教え始めた。そして、社会や他の者たちに対する配慮もなく自分の欲求を満足させるためにする、すべての行為には「悪徳(VICE)」という名を与え、"the impulse of Nature"に反して "a Rational Ambition of being good"から、他人のためになろうとする、あるいは自分の情念(Passions)を克服しようとするすべての行為(Performance)にたいしては「美徳(VIRTUE)」という名を与えた。しかし、「自制(Self-denial)」と「公共精神(Public spiritedness)」を説く政治家や支配階級の目的は、"reap the Fruits of the Labour and Self-denial of others, and at the same time indulge their own Appetites with less disturbance" (86)なのである。古代国家において、人間を極度の自制に駆り立てるための政策は、"the most effectual Means that human Pride could be flatter'd with" (87)を利用することであった。それゆえ美徳(Moral Virtues)は "the Political Offspring which Flattery begot upon Pride" (88)ということになる。

『蜂の寓話』の副題「私悪すなわち公益」の意味するところは、「社会の本質についての探究」の最後で説明されているように、"Private Vices by the dextrous Management of a skilful Politician may be turn'd into Public Benefits" (371)なのである。また、風刺詩「ブンブンうなる蜂の巣」の "And Vertue (sic), who from Politicks / Had learn'd a Thousand cunning Tricks, / Was, by their happy Influence, / Made Friends with Vice" (68)という部分の注釈（F）では、家族や社会にたいする義務を立派に果たしている善良な市民も、自負や奢侈などといった、顧客の悪徳によって成り立つ商売で生計を立てているという例をあげて、美徳は悪徳と仲良くなっているという主張の裏付けとしている(117-18)。

美徳は政治的意図によって教え込まれたもので、人間の本性に反するものなので、良き市民としての義務を果たしている人々も、悪徳と無縁ではありえないと説くマンデヴィルにたいし、フィールディングは人間の善良さ、愛、を強調することで反論している。とくに『トム・ジョーンズ』は、主人公と彼の養父オールワージー、恋人ソファイアの善良さを強調するだけでなく、作品中のあちこちで、マンデヴィルにたいする反論を展開している。その6巻1章「愛について」では、『アミーリア』でブースも言っているように、人間の心には 愛などという感情はないと主張している哲学者たちは、 "there were no such things as Virtue or Goodness really existing in Human Nature, and who deduced our best Actions from Pride" (268)と説いて、世間を驚かせている哲学者たちと同じ人物たちだろうと述べている。ここで言及されている、ホッブズの流れを汲む

哲学者たちのうち、18 世紀における代表的存在がマンデヴィルである。彼らにたいしフィールディングは次のように反論しているので、ここでは、 "Love"は "Virtue"や "Goodness"と同義語として使われているのがわかる。[3]

> … there is in some (I believe in many) human Breasts, a kind and benevolent Disposition, which is gratified by contributing to the Happiness of others. That in this Gratification alone, as in Friendship, in parental and filial Affection, as indeed in general Philanthropy, there is great and exquisite Delight. That if we will not call such Disposition Love, we have no Name for it. (VI, i. 270)

『雑文集』(*Miscellanies*, 1743)第 1 巻に収められた "An Essay on Knowledge of Characters of Men"でも、"Good-Nature"について同様の説明がなされている。

> Good-Nature is that benevolent and amiable Temper of Mind which disposes us to feel the Misfortunes, and enjoy the Happiness of others; and consequently pushes us on to promote the latter, and prevent the former; and that without any abstract Contemplation on the Beauty of Virtue, and without the Allurements of Terrors of Religion. (158)

マンデヴィルが、美徳というものは教育によって植えつけられたものだと主張し、『名誉の起源と戦争におけるキリスト教信仰の有用性についての考察』(*An Enquiry into an Origin of Honour and the Usefulness of Christianity in War*, 1732) の序文において、美徳が習慣となってしまい、本人が意識しなくなっているような場合も、それは教育の効果であり、自然なものではないのだと強調している

> Yet I am willing to allow, that Men may contract a Habit of Virtue, so as to practise it, without being sensible of Self-denial, and even that they may take Pleasure in Actions that would be impracticable to the Vicious: But then it is manifest, that this Habit is the Work of Art, Education and Custom; and it never was acquired, where the Conquest over the Passions had not been already made. (11)

またマンデヴィルは、 善良さを愛する気持ち("their Love to Goodness")だけから、自慢もせず黙って立派な行為をする人間もいるだろうが、そのような人たちのなかにも少なからぬ自負が見出されるはずだと主張する。

> … Such Men, I confess, have acquir'd more refin'd Notions of Virtue than those I have hitherto spoke of; yet even in these (with which the World has yet never swarm'd) we may discover no small Symptoms of Pride, and the humblest Man alive must confess, that the

Reward of a Virtuous Action, which is the Satisfaction that ensues upon it, consists in a certain Pleasure he procures to himself by Contemplating on his own Worth: Which Pleasure, together with the occasion of it, are as certain Signs of Pride, as looking pale and trembling at any imminent Danger, are the Symptoms of Fear. (*The Fable*, 92)

すなわち、自然な善意とみえるものも、その根源を探れば "Pride"から生じているのだというのである。

このように突き詰めて考えれば、フィールディングが善良さの表れとしているどんな善行も、マンデヴィルによれば "Pride"と無縁ではないということになる。フィールディングの主張する善良さを体現する人物、トム・ジョーンズは、ロンドンで宿泊先の女主人の親戚、アンダーソン一家の窮状を助け、アンダーソンともどもミラー夫人に改めて礼を言われると、次のように答える。

... He had been sufficiently rewarded already. Your Cousin's Account, madam ... hath given me a Sensation more pleasing than I have ever known. He must be a Wretch who is unmoved at hearing such a Story; how transporting then must be the Thought of having happily acted a Part in this Scene. If there are men who cannot feel the Delight of giving Happiness to others, I sincerely pity them, as they are incapable of tasting what is, in my Opinion, a greater Honour, a higher Interest, and a sweeter Pleasure, than the ambitious, the avaritious, or the voluptuous Man can ever obtain. (XIII, xi. 728)

マンデヴィルが"the Reward of Virtuous Action"である満足感を "Contemplating on his own Worth"によって得られる喜びと説明しているのにたいし、上記引用中でジョーンズの喜びは "Delight of giving Happiness to others"と表現され、そこには自分の価値についての意識は入っていないように見える。しかし、このような喜びも、マンデヴィルにかかれば "Pride"の表れと解釈されることだろう。[4]

1723 年の版まではほとんど注目されなかった『蜂の寓話』が突然、激しい攻撃の的となった大きな要因は、新しく収められた「慈善および慈善学校についての試論」にあると、マンデヴィルは 1724 年版で新たに加えられた「本書の弁明」("Vindication of the Book")で推測しており、ペンギン版『蜂の寓話』の編者フィリップ・ハース(Phillip Harth)の解説もそれを裏付けている。

When the avalanche of attacks on the *Fable* began in 1723, they certainly were not addressed to this particular essay alone. But Mandeville may have been right in suggesting

that it was his attack on the charity schools which triggered public reaction, for in this essay he assaulted an institution, more cherished than any system of ethics, in which a large sector of the British public had made a financial as well as an emotional investment. (35)

ハースも指摘しているように、寄付で病院その他の慈善施設をつくれるほど金持ちではない多くの人々が、小額の寄付で慈善行為を実践することができる慈善学校は、イギリス人にとって大事なものだったのである。それにたいしてマンデヴィルは、繁栄する社会を支えるために必要とされている、辛い労働や汚れ仕事をする多くの貧しい者たちにとって、読み書きを教えることは却って害になると説き、そのような一般市民の「善意」に冷水を浴びせかけたのである。

問題の「試論」は次のような定義から始まる。

Charity is that Virtue by which part of that sincere Love we have for our selves is transferr'd pure and unmix'd to others, not tyed to us by the Bonds of Friendship or Consanguinity, and even meer Strangers, whom we have no Obligation to, nor hope or expect any thing from. (263)

ここで "that sincere Love we have for our selves"と言っているのが、いかにもマンデヴィルらしいところである。人間はまず自分の利益を考えるものだというのが彼の考えの根幹なので、自分に対する愛こそが真摯なもので、それを全くの他人に与えるのが "Charity"だというのである。そして、友人や親戚のためにすることは、一部は自分のためにすることで、甥や姪のために行動して、それを慈善心でしているというのは欺瞞であると主張する。親戚のためにできることをすることは世間から期待されていることであり、それをしない場合は評判に傷がつくというのである。さらに彼は、"To be charitable then in the first Place, we ought to put the best Construction on all that others do or say, that the Things are capable of' (263)と言う。これも一見あたりまえのことのように思えるが、あとに挙げられている例がいかにも皮肉である。すなわち、自分のために立派な家を建て、豪華な家具で飾り、食器や絵に財産をつぎ込んだ人を、虚栄心のためではなく、芸術家を励まし、人に仕事を与えるためにしているのだと解釈し、教会で眠っているのを、注意力を増すために目をつぶっているのだと考える、というものである。

『トム・ジョーンズ』においても "Charity"は重要な美徳として強調され、"Charity"にたいする態度は、その人物が善人か偽善者かを判断する基準になっている。上に引

用したトム・ジョーンズのアンダーソン一家に対する "Charity"は彼の善良さの証であり、彼の異父弟で敵役ブライフィルの父、ブライフィル大尉の "Charity"論は、彼が偽善者であることの証明になっている。彼は、聖書で説かれている "Charity"は「慈善(Beneficednce)」とか「気前のよい行為(Generosity)」を意味するものではないと主張する。(94)

> Those (he said) came nearer to the Scripture Meaning, who understood by it Candour, or the forming of a benevolent Opinion of our Brethren, and passing a favourable Judgment on their Actions; a Virtue much higher, and more extensive in its Nature, than a pitiful Distribution of Alms, which, though we could never so much prejudice, or even ruin our Families, could never reach many; whereas Charity, on other and truer Sense, might be extended to all Mankind. (II, v. 94)

この引用部分はまさに、マンデヴィルを意識したものであろう。とくに "Charity"とは "a pitiful Distribution of Alms"ではなく、"the forming of a benevolent Opinion of our Brethren, and passing a favourable Judgment on their Actions"であるというところは、先に引用したマンデヴィルの "To be charitable, we ought to put the best Construction on all that others do or say, that Things are capable of"とよく似ている。ブライフィル大尉の長広舌は、マンデヴィルの "Charity"論の欺瞞性を暴くことを意図していると考えてよいだろう。

それに対しオールワージーは次のように答える。

> He could not dispute with the Captain in the *Greek* Language, and therefore could say nothing as to the true Sense of the Word, which is translated *Charity*; but he had always thought it was interpreted to consist in Action, and that giving Alms constituted at least one Branch of that Virtue. (95)

"Charity"とは行為にあるというオールワージーの言葉は、彼の行動的美徳を如実に表わしており、口先だけの "Charity"を論じる、ブライフィル大尉の偽善と明らかな対照をなしている。さらに彼は、施しをしても、それは "Christian Law"と "the Law of Nature itself"によって課された義務を果たしているだけなので、とくに称賛されるようなことではないと述べている(95)。ただ次のような場合だけ、"Charity"は称賛に値するという。

> … where from a Principle of Benevolence, and Christian Love, we bestow on another what we really want ourselves; where, in order to lessen the Distresses of another, we

condescend to share some Part of them by giving what even our own Necessities cannot well spare. This is, I think, meritorious.... (96)

トム・ジョーンズのアンダーソンにたいする施しはこれにあてはまる。5 人の子供と身重の妻のために追剥をはたらこうとしたアンダーソンを取り押さえたジョーンズは、彼の窮状を知ると、乏しい財布から 2 ギニーの金を与えたのである。その結果、彼はロンドンで無一文の状態になり、恋人ソファイアの居所を知るため、妖精の女王を名乗るベラストン夫人の誘いに乗って仮想舞踏会に行くときも、椅子駕籠代の 1 シリングをバートリッジから借りなくてはならず、舞踏会のあとは徒歩でベラストン夫人について行き、椅子駕籠の担ぎ手たちから嘲笑を浴びる。まさにトム・ジョーンズは、自分も窮乏状態にありながら、他人を救うためになけなしの金さえ与えてしまうのである。さらに仮装舞踏会の翌朝、ミラー夫人から親戚の窮状を聞くと、自分が助けた追剥とも知らず、ベラストン夫人から与えられたばかりの 50 ポンドを差し出し、そこから必要なだけ持っていくようにと言う。結局、ミラー夫人は 10 ギニー持っていくので、彼は手に入った金の 5 分の 1 以上をたちまち、慈善のために手放したことになる。このように、トム・ジョーンズの行為は計算を度外視したものである。

オールワージーは上の引用部分に続けて、余分な金を持っている人間が、自分の家に高額な絵を飾ったり、その他の "idle, ridiculous Vanity" を満足させるためではなく、多くの家族を困窮から救うことについて、"this seems to be only being Christians, nay indeed, only being human Creatures" と述べているが(96)、これも、マンデヴィルが上記の "Charity" 論で、皮肉な好意の対象として、立派な家を建て、食器や絵に財産をつぎ込む人を例の挙げているのを、念頭に置いた言葉と考えられる。さらにオールワージーはそのような慈善行為をすることについて、「キリスト教徒」、「人間」という言葉と並べて、「美食家(Epicures)」という言葉を使っている。これは、フィールディングが "my beloved Author" と呼ぶ、神学者バロー(Isaac Barrow, 1630-77) の主張ともつながるのだが[4]、マンデヴィルが「ブンブンうなる蜂の巣」の注釈 "O" で 、"the Doctrine of *Epicurus*" についての相反する解釈を紹介して、次のように結論づけているところを意識したものだろう。

I shall not decide their Quarrel, but am of Opinion, that whether Men be good or bad, what they take delight in is their Pleasure, and not to look out for any further Etymology from the learned Languages, I believe an *Englishman* may justily call everything a Pleasure that

pleases him, and according to this Difinition, we ought to dispute no more about Men's Pleasures than their Tastes.... (170)

この引用中の語源云々というところも、ブライフィル大尉の "Charity"論に反映されているようにみえる。

オールワージーはさらに "Nothing less than a Persuasion of universal Depravity can lock up the Charity of a good Man; and this Persuasion must lead him, I think, either into Atheism, or Enthusiasm" (96)と述べているが、これがまさにホッブズやマンデヴィルの考えを批判していることはあきらかである。まえに引用した『トム・ジョーンズ』6巻1章「愛について」で「愛(Love)」を「他の人たちの幸福に貢献することで喜びを感じる、親切で優しい気質」と表現していることからも、フィールディングは "Charity"も "Love" の同義語として使われていることがわかる。[6] フィールディングは一貫して、マンデヴィルが「愛」という感情を否定していると非難しているが、ブライフィル大尉とオールワージーの "Charity"談義は全体として、マンデヴィルに対する、パロディーを交えた反論となっている。

また、オールワージーは施しに関して、"Law of Christian"という言葉を使っている。キリスト教徒としての義務を強調するところが、マンデヴィルとフィールディングの違いである。トム・ジョーンズの言葉にも、慈善の報いとして "Honour"、"Pleasure" と並んで、 "Interest"という言葉が見られるが、これは慈善が神の意にかなうことであり、神の嘉する行為をすることは人間の利益となるということだろう。フィールディングは『コヴェント - ガーデン・ジャーナル』の2号、29号、39号、44号で "Charity" を扱っているが、1752年6月2日付の44号では、はっきりとそのような意味で 、"Charity"を "Interest"という点から論じている。

I have in a former Paper endeavoured to shew, that a rich Man without Charity is a rogue; and perhaps it would be no difficult Matter to prove, that he is also a Fool. If a Man, who doth not know his true Interest, may be thought to deserve that Appellation; in what Light shall we behold a Christian, who neglects the Cultivation of a Virtue which is in Scripture said *to wash away his Sins*, and without which all his other good Deeds cannot render him acceptable in the Sight of his Creator and Redeemer. (246)

フィールディングにとって、キリスト教徒としての義務は当然のことであるのにたいし、マンデヴィルは、宗教が美徳と同様、人間の本性に反する自制を必要とするもの

であることを強調している。

> The chief duty then of real religion among christians, consists in the sacrifice of the heart, and is a task of self-denial to be perform'd with the utmost severity against nature.
> (*Free Thoughts on Religion,* 16)

ここまで、マンデヴィルとフィールディングの違いをみてきたが、社会に蔓延る悪徳については、フィールディングとマンデヴィルの見方はほとんど同じようにみえる。スチュアート・シム(Stuart Sim)も *The Eighteenth-Century Novel and Contemporary Social Issues* (2008)の第5章 "*The History of Tom Jones, A Foundling* and Anti-Social Behaviour" で次のように書いている。

> Henry Fielding's *Tom Jones* (1749) pictures a society where almost everyone is motivated by self-interest. This works out as a drive to exploit and cheat others as much as circumstances will allow, generally under the guise of a hypocritical air of civility. (65)

このあと言及されているのはホッブズとの類似性だが、マンデヴィルと言い換えても同じであろう。「誰もが自分の利益によって動く社会」とは、まさにマンデヴィルが描いている社会である。ただマンデヴィルは、人間の作る社会とはこういうものであり、この状態が社会の繁栄をもたらしていると主張しているのにたいし、フィールディングは古典主義時代の理想を掲げ、そのような腐敗堕落した社会のなかでも、人間のあるべき姿を描こうとしているのである。人間の営みを飽くまでも理詰めに見ようとする風刺家マンデヴィルと、判事として社会にはびこる悪、欺瞞、偽善を日々、目のあたりにしながら、人間性の明るい面を信じ、強調しようとするフィールディングの態度は、裏表の関係にあると言えるだろう。

『トム・ジョーンズ』は喜劇である。最後にブライフィルの悪事が暴露され、主人公トム・ジョーンズがブライフィルの異父兄で、オールワージーの甥であることがわかる。そして彼はオールワージーの跡取りとなり、理想の恋人ソファイアと結婚して物語は終わる。しかし主人公が生きているのは、上の引用に見られるように、人々が欲で動くのが当たりまえで、金のないものが悲惨な状態に陥る社会である。そこでは美徳が必ずしも幸福につながっていないという現実を、語り手も認めている。

> ... For they may here find that Goodness of Heart, and Openness of Temper, tho' these may give them great Comfort within, and administer to an honest Pride in their own Minds, will by no Means, alas! do their Business in the World. (III, vii. 141)

このあとに述べられているように、そこでは "Prudence"が必要とされ、内面の美しさよりも外見の方が重要なのである。

> Prudence and Circumspection are necessary even to the best of Men. They are indeed as it were a Guard to Virtue, without which she can never be safe. It is not enough that your Designs, nay that your Actions are intrinsically good, you must take Care they shall appear so. If your Inside be never so beautiful, you must preserve a fair Outside also. (III, vii. 141)

外見をよく見せるということを勧めているので、ここで使われている "Prudence"は「思慮分別」、「用心深さ」というだけでなく、「抜け目のなさ」、「ずる賢さ」も意味しているようにみえる。バテスティン(Martin C Battestin)によれば、"Prudence"はもともと "the noblest virtue of antiquity"で、外見に隠された真実を見抜く洞察力、さらに "the power to *choose* between good and evil and to determine the proper and effective means of achieving the one and avoiding the other" を意味するものであったが、17 世紀のあいだに "nothing more than a mean-spirited and cautious expediency"を意味するようになってしまったという(168)。フィールディングもこの言葉を両方の意味で使い分けている。

物語の最後でトム・ジョーンズは、オールワージー氏の跡取りとして、またソファイアの夫に相応しく、もともとの意味での "Prudence"を獲得したようである。しかし、この言葉の持つもう一つの意味も切り離すことはできない。彼のもつ底抜けの善良さを損なわずに、マンデヴィルとフィールディング自身が描いている、欺瞞に満ちた社会を生き抜くことは、現実的には不可能なことにみえる。[7]

『トム・ジョーンズ』の次の作品『アミーリア』においては、幼い子供たちを抱えたアミーリアとその夫ブースがロンドンで直面する社会の暗部が描きだされ、前作の明るさはみられない。しかし前作『トム・ジョーンズ』においても、主人公がロンドンに出てからの場面では、喜劇的要素がかなり弱まっているようにみえる。ミラー夫人の家に宿をとったジョーンズは、たちまち金の問題に直面する。

> To confess the Truth, Mr *Jones* was now in a Situation, which sometimes happens to be the Case of young Gentlemen of much better Figure than himself. In short, he had not one Penny in his Pocket; a Situation in much greater Credit among the ancient Philosophers, than among the modern wise Men who live in *Lombard* Street, or those who frequent *White's* Chocolate-House. (XIII, vi. 710)

そして成り行きとは言え、レディ・ベラストンの愛人となって金銭の援助を受けるの

は、語り手のユーモラスな調子にも関わらず、善良な主人公のイメージに陰を落としている。[8]

ロンドンの場面では、ジョーンズだけでなく、経済的裏付けがないまま結婚して困窮するアンダーソンや、ジョーンズと同宿の若い紳士ナイチンゲールと宿の娘ナンシーの関係など、喜劇的な解決がなかった場合の悲惨な可能性を暗示する例が、複数みられる。ナイチンゲールは、金の亡者である父親のお陰で、何不自由なく遊び暮らす身分だが、生活力は全くないので、父親が決めた相手と結婚するため、彼の子供を身ごもったナンシーを捨てようとする。結局、トム・ジョーンズの説得で彼はナンシーとの結婚を決意するが、父親に逆らって勘当された場合、彼はトム・ジョーンズと同様の無一文となり、ジョーンズが助けたアンダーソンと同様の窮地に立つことは、明らかである。トム・ジョーンズも、愛するソファイアを悲惨な状態に引きずりおろすことを考えて、最後にオールワージーの跡取りとなるまでは、彼女との結婚を望むこともできない。

そのような現実と物語のハッピー・エンディングの共存を可能にしているのは、この作品が喜劇であるということに加えて、語り手の「楽天的」な語り口だといえるだろう。語り手は主人公トム・ジョーンズの特徴の一つに、その楽天的な気質をあげている。楽天的な気質はどんなに見通しが暗くても、希望を失わないことを可能にする。主人公のこのような性質と、作品の喜劇性を支える語り手のユーモラスな調子は重なりあって効果をあげている。[9]

主人公たちを取り巻くさまざまな人物たちも、語り手のユーモラスな語り口によって語られると、彼らの悪人ぶりさえも、滑稽で面白いものと見えてくる。偽善者ブライフィル親子についても、父親の「慈善」についての、もっともらしく、かつ口先だけの議論も、息子の方がトムへの嫉妬からソファイアの小鳥を逃がしたときの理屈づけ、ソファイアの自分への嫌悪を知りながら、彼女への求婚をつづける理由をオールワージー氏に説明するときのもっともらしさは、見事というほかはない。それに比べると、家庭教師のスワッカムやスクエアの議論はいかにも単純である。

また、主人公トムにさまざまな恩恵を被っているにもかかわらず、彼がオールワージー氏の屋敷を追い出されたときに与えられた、なけなしの500ポンドの小切手を拾っておきながら、素知らぬ顔でトムがそれを探すのを手伝うブラック・ジョージも、後に彼の悪事に気付いたオールワージーが指摘しているように、忘恩という、この作

品中でももっとも非難に値するものとされている罪を犯しているにもかかわらず、その扱いはユーモラスで、彼は憎めない人物として描かれている。彼がソファイアへのトムの手紙を届け、彼女からいくばくかの金を託された時も、それをねこばばしなかった理由が、そちらの方が露見しやすいと判断したため、と説明されているにもかかわらず、その説明と並行して、彼のトムにたいする友情は本物であるとも述べられている。実際、ロンドンでパートリッジと再会したブラック・ジョージは、父親ウエスタンによって幽閉されているソファイアのもとにトムの手紙を届けるなど、友情に厚いところを示す。パートリッジについても、彼がトムに同行し、彼のために働くのは、自分の利益を考えてのことである。ロンドンへの道中での振る舞いや、ソファイアが落とした小切手を現金に変えて借用するようにとトムに薦めるなど、道徳的にかなりの問題があるにも関わらず、自己防衛のためとはいえ、フィッパトリックを傷つけて牢屋に入れられたトムを救おうと奔走する、パートリッジの忠誠心が強調される。

宿屋の主人が客から法外な料金をむしり取るのも、当然のように語られていながら喜劇的で、マンデヴィルの風刺的な書き方と対照をなしている。『トム・ジョーンズ』の献辞にもあるように、フィールディングはこの作品で 、"to laugh Mankind out of their favourite Follies and Vices"(8)を目指しているのである。マンデヴィルにたいする彼の最大の武器は「笑い」だということができるだろう。[10]

注

1 本稿では、フィールディングの著作からの引用には、 *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding* を使用し、引用末尾の括弧内に小説の場合は巻、章、ページを、小説以外の著作はページを示す

2 普通名詞の "love"を "Love"と表記しているのは、ここで使っている『蜂の寓話』と "Wesleyan Edition"のフィールディング全集では、名詞の表記が大文字で始まっているので、引用部分と統一するためである。他の名詞についても同様である。

3 マイケル・アーウィン(Michael Irwin)も、フィールディングが"good-nature"と "virtue"を同義語として使っていることを指摘している。

> Good-nature for him, then, as for the latitudinarians, is practically synonymous with virtue itself, and merely provides a convenient label for the warm and active sympathy which he regards as the foundation of all morality. (12)

4　マンデヴィルの主張するところによれば、例えば、トム・ジョーンズの次の行為などは「欺瞞」の１例となるだろう。ジョーンズはロンドンへの旅の途中で弁護士のダウリングと会い、自分の身の上を語るが、オールワージー氏のもとから追放された部分については、ブライフィルや家庭教師たちの讒言の内容については知らないまでも、その他のことについても、“he did not shew them in the most disadvantageous Light: For though he was unwilling to cast any Blame on his former Friend and Patron, yet he was not very desirous of heaping too much upon himself” (658-59)と、自分の行為については多少贔屓目に語っている。マンデヴィルには「ブンブンうなる蜂の巣」につけた解説で、商品を巡る売り手と買い手の駆け引きも「欺瞞」の例として、彼らに「悪人(Knave)」という呼び名は使われていなくても、実態は彼らも同じなのだと述べている(96)のだから。

5　*Tom Jones* (96)の脚注を参照。

6　ブライフィル大尉が問題にしているギリシャ語 “agape”について、フィールディングは『チャンピオン』1750 年４月５日号で、“Charity”と訳すより、“Love”と訳す方が良いと主張している (cf. *Tom Jones*, 95 n.)。朱牟田夏雄訳の『トム・ジョウンズ』では、この部分で、 “Charity”の訳に「同胞愛」、「愛」、「慈善」という言葉を使い、これらすべてに「チャリティ」とルビを振っている（岩波文庫、第１巻、83-86)。

7　ニコラス・ハドソン(Nicholas Hudson)は次のように書いている。

> …a steady attention to ‘prudence’ would effectively choke off most of the good that Tom does in the novel. A ‘prudent’ Tom would not have hastened to the rescue of Mrs Waters when she is attacked by Ensign Northerton; he would not have forgiven and relieved the highwayman who accosts hi on the road to London. Tom’s very goodness, in brief, is demonstrated by his willingness to rush beyond what the world deems decorous or wise when his good-hearted nature directs him. (87)

キンキード＝ウィークスも、その論文を次のような言葉で締めくくっている。

> It will not do to reduce Fielding to moral patterns, let alone prudential ones. His ‘Sophia’ depends on the creation of readers whose moral judgement has become inextricable fused, through his art, with laughter, affection and imagination. (156)

8　Laura J. Rosenthal の *Infamous Commerce: Prostitution in Eighteenth-Century British Literature and Culture* (2006)、第６章 “*Tom Jones* and the ‘New Vice’”では、彼の “infamous”な状況の意味するところを余すところなくあきらかにされている。

9　「楽天的な気質」について、『トム・ジョーンズ』の語り手は次のように述べている。

Reader, if thou hast any good Wishes towards me, I will fully repay them, by Wishing thee to be possessed of this sanguine Disposition of Mind: Since, after having read much, and considered long on that Subject of Happiness which hath employed so many great Pens, I am almost inclined to fix it in the Possession of this Temper; which puts us, in a Manner, out of the Reach of Fortune, and makes us happy without her Assistance. (XIII, vi. 708)

10　ニコラス・ハドソンは論文の最後で、こうに述べている。

Humour and irony seemed to Fielding the only responses that possessed the subtlety to bridge the old and the new, and to straddle the threshold of the serious and non-serious in the face of these changes. If we are still able to join with Fielding's laughter in *Tom Jones*, it is because the transformations and ambiguities of this emergent modern world have never ceased to unfold. (93)

参照文献

Battestin, Martin C. *The Providence of Wit: Aspects of Form in Augustan Literature and the Arts*. Oxford: The Clarendon Press, 1974

Fielding, Henry. *Amelia*. Edited by Martin C. Battestin, with an textual introduction by Fredson Bowers. Oxford: Oxford UP, 1974.

———, *Contributions to The Champion and Related Writings*. Edited by W. B. Coley. Oxford: Oxford UP, 2003.

———, *The Covent-Garden Journal and A Plan of the Universal Register-Office*. Edited by Bertrand A. Goldgar. Middletown, CT: Wesleyan UP, 1988.

———, *The Historoy of Tom Jones: A Foundling*. Introduction and commentary by Martin C. Battestin, text edited by Fredson Bowers. London: Oxford UP, 1974.
朱牟田夏雄訳『トム・ジョウンズ』岩波文庫、全４巻、1951。

———, *The Jacobite's Journal and Related Writings*. Edited by W. B. Coley. London: Oxford UP, 1974.

———, *Miscellanies, Volume I*. Edited by Henry Knight Miller, textual introduction by Fredson Bowers. London: Oxford UP, 1972.

Hudson, Nicholas. "Tom Jones." *Cambridge Companion to Henry Fielding*. Edited by Claude

Rawason. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 80-93.

Hundert, E. J. *The Enlightenment's Fable: Bernard Mandeville and the Discovery of Society.* Cambridge: Cambridge UP, 1994.

Irwin, Michael. *Henry Fielding: The Tentative Realist.* London: Oxford UP, 1967.

Kinkead-Weekes, Mark. "Out of the Thicket in *Tom Jones.*" *Henry Fielding: Justice Observed.* Edited by K. G Simpson. London: Vision,1985. 137-157.

Mandeville, Bernard. *An Enquiry into an Origin of Honour and the Usefulness of Christianity in War*. Bibliobazzar, 2007.

———, *The Fable of the Bees, or Private Vices, Public Benefits*. Edited with an introduction by Phillip Harth. London: Penguin Books, 1970.

泉谷治訳『蜂の寓話——私悪すなわち公益』法政大学出版、1985 年。

———, *Free Thoughts on Religion, The Church and National Happiness*. 1729. La Vergne, TN: Kessinger Publishing's Rare Reprints, 2010.

Rosenthal, Laura J. *Infamous Commerce: Prostitution in Eighteenth-Century British Literature and Culture.* Ithaca: Cornell UP, 2006.

Sim, Stuart. *The Eighteenth-Century Novel and Contemporary Social Issues: An Introduction.* Edinburgh: Edinburgh UP, 2008.